ブックレビュー

『女の直感が男社会を覆す』
上・ビジネスはどう変るか
下・恋愛、家族はどう変るか
ヘレン・E・フィッシャー著　吉田利子訳（草思社）

いわゆるフェミニズム（女性解放論）の立場から書かれた書物は昨今数多い。しかし、本書はその主流的な考えとは大分異なる立場から書かれている点でユニークかつ刺激的である。

現在のフェミニズムの主流的な考えによれば、男女の生物学的な性差は社会活動において本来無視できる程度の役割しか果たさない。個体差や後天的に獲得された知識、行動規範などの影響の方がはるかに大きい。現実の社会生活において男女の間に歴然として存在する役割分担は、「男性はかくあるべき」、「女性はかくあるべき」という社会的文化的な圧力の産物である。そしてその背後には、男性による女性支配の構造が存在する。ボーボワールが書いたように、女性は「女に生まれる」のではなく、男性中心社会の中で、男性より劣る「第二の性」としての「女になる」のである。

ところが、フェミニズムの主流であるこの社会・文化決定論に対し、本書の著者は「時代遅れで、非生産的だ」と断じてはばからない。それは、著者が自然人類学者であり、脳の構造や男性ホルモン・女性ホルモンの働きといった生物学的な性差を基礎として議論を組み立てているからである。著者によれば、男女には脳の構造や性ホルモンの働きなど生物学的な性差が明確に存在している。そして恐らくその違いは、生存をかけた何百万年という長い人類の歴史の中で選択されることによって生まれてきたものである。こうした男女の生物学的な差が、社会生活における男女差の多くに影響を与えている、というのが著者の主張である。

こうした主張には、多くの読者は抵抗を感じるかもしれない。生物学的に人間の優劣を論じる議論には、確かに大きな危険がある。安易に本書の議論を受け入れるべきではないだろう。

にもかかわらず本書が読者の共感を呼ぶとすれば、それは原題が『The First Sex（第一の性）』であるように、本書は男女の生物学的な性差を前提にして、今までネガティブにとられることが多かった「女性の特性」を、これからの社会に不可欠な優れた特性として肯定的にとらえているからであろう。例えば、本書によれば、女性は物事を全体的に把握し、精神的に柔軟で想像力に富み、長期的な計画を立てる傾向がある。著者は、女性がすぐれているこうした思考方法を「ウエブ（網の目）思考」と呼ぶ。これに対して男性の思考方法は、集中的・直線的で積み上げ的な「ステップ（段階的）思考」である。

情報化が進み、ピラミッド的な社会構造が分節化されたネットワーク社会に変わる中で、女性が得意とするウェブ思考は非常に重要な役割を担うであろう。そのことによって女性の役割が高まり、多くの分野で女性が再び「第一の性」の地位を獲得する、というのが本書の結論である。井戸端会議的な情報交換、ゴシップ好き、人間関係重視といった「女性の特性」が、新しい社会を引っ張っていくであろう。特に、中年女性が持つ賢さ、積極性、忍耐強さ、知識、人間関係づくりのうまさなどは貴重な資源である。社会や組織がそれを活かさない手はない。

著者はこうした議論の裏付けとして、科学的な研究の成果を縦横無尽に駆使する。その割にはマユツバ的な結論や主張も多い気がするが、女性の力を活かせない社会や組織はこれから発展できないという本書のメッセージには、共感する読者も多いであろう。なお、ページ数は若干多いが、平易で読みやすい本である。

（二〇〇〇年六月、上二二二頁、下二三八頁、各一、六〇〇円）

（須田敏彦）